

インタビュー

VOL.13

重見 博子 先生

山城広域振興局健康福祉部 部長

山城北保健所 所長



多くの転機を経て新たな道へ
～50歳で研究、60歳で保健所長に～

2025年1月10日に、「キャリア・復職支援のロールモデル座談会」を開催し、重見博子先生と大橋まひろ先生を囲んでセンタースタッフが話を伺いました。座談会の中での重見先生のお話をインタビュー形式でまとめました。

1 自己紹介をお願いします

現在、山城北保健所所長を務めており、本学臨床検査・感染制御部併任講師もしております。医師としてのキャリアをスタートしてから、渡米も含む何度もの転勤、子育て、休職、復職、非常勤勤務、研究職から行政まで多様なライフイベントやキャリアを経験してきました。私のこれまでの経験をもとに、離職や復職に悩む方々へのヒントやエールをお伝えできればと思います。

2 これまでのキャリアの軌跡について教えてください

私は本学卒業後旧第二内科に入局し、2年間の研修後に関連病院に2年間出張しました。その後はほぼ10年毎にキャリアの転機を迎えています。30歳台始めに夫の海外赴任に伴い渡米し、一時休職を経験し、その後ジョンス・ホプキンス大学でリサーチフェローとして血圧調整の研究を行いました。帰国後は半年間の非常勤勤務を経て大原記念病院内科で常勤医として復職し、40歳で夫の転勤に合わせて愛知県に転居しました。ここで半年間小学生二人の子育てに専念し、再び市中病院の常勤医となりました。50歳で夫の異動にともない福井大学医学部の大学院に進学し、基礎研究に挑戦しました。血液腫瘍内科で細胞実験を行い、感染制御の仕事にも携わりました。50代なかば

で一度京都に戻って市中病院に勤務しました。しかし、福井で単身となった夫が半年間で 8kg も体重増加してしまい、これではいけないと福井大学に戻ることになりました。60歳になって本学関係者や同級生から京都の保健所長就任の打診をいただき、現職となりました。この後70代でどんな転機が訪れるのかわかりませんが、あと数年考えていこうと思っています。

3 渡米に関するエピソードを教えてください

夫の留学にともなって、第一子連れて同行することになりました。当時は英語力に自信がなく、現在のようなインターネットの情報もなかったので、まず東京のアメリカ政府の観光局に、返信用封筒を同封してボルチモアの情報を送ってもらうよう依頼する手紙を書きました。そして手に入れた地図をみてワシントン DC からどうやってボルチモアに移動するかなどをひとつひとつ考えて準備をしました。

渡米後、第二子を出産し2年4ヶ月間休職していたところ、ジョンズ・ホプキンス大学にポジションがあるというお声がけをいただき、お給料をいただいて血圧調節の研究をしました。

4 その後の異動や復職はどのような経緯でしたか

帰国後、半年間医局からの非常勤の仕事をした後、大原記念病院内科の常勤医として復職しました。ところが夫が愛知県に異動になり、子どもが新しい土地で学校になじめるかどうか心配だったので、半年間休職しました。この半年は子どもの宿題を見たり、夏休みに家族で2週間のスイス旅行をしたり、思い出に残る貴重な経験をしました。夏休みの自由研究では、目的、方法、結果、結論の書き方を子どもに教えて、子ども二人合わせて10種類近くの自由研究に取り組みました。自分の趣味のピアノも習ったりしました。

その後東海記念病院の府立医大出身の先生のお誘いで復職しました。私が十分な仕事できていないのではないかと不安を打ち明けたとき、この病院の外科の先生に言われた言葉が私の支えになっています。「僕は、子育てを放棄したりご主人の仕事の邪魔をしながら仕事を続けている女医さんは偉いとは思わないよ。重見さんは重見さんでしっかり仕事をしているよ。」

そして、このまま研究もしないままの人生かと思っていたときに、主人の赴任先の福井大学血液腫瘍内科学の教授からのお誘いで白血病細胞の薬剤耐性のメカニズムの研究を始めることになりました。知らない土地で新しい仕事を始めるのはすごく不安でいっぱいでしたが、これも一つのチャンスだと思って頑張ることにしました。その後感染制御部の仕事も兼務することになりましたが、教授が「やりたい実験は全部してよいし、学会にもどんどん出してください。」とおっしゃっていたので、1年間で海外学会に2回、国内学会を含めて10回以上発表しました。自分の発表だけでなく大学院生や看護師さんの発表も含めると、年間45件もの抄録を執筆しました。大変ではありましたがすごく充実していました。

5 その後、保健所長に就任されたのですね

そうです。ご縁があって保健所勤務になり、予防医学、障害者福祉、精神疾患、環境保全、水質管理など多岐に渡る仕事をする事になりました。特にこの数年は新型コロナウイルス感染症対策が主たる業務でした。ただ、それだけではなく保健師さんや医療従事者の育成も私の大きな仕事だと思っています。

自分のことを棚にあげていうならば、保健所長は座ってハンコを押すだけの仕事ではなく、人を護り環境を守る仕事なので、臨床も研究も経験し、良好な人間関係を構築でき、また広い視野で考えて短期的、中期的、長期的な計画性のある人材が就任していただきたいと思っています。こういう方はなかなか大学側が手放してくださらないのですけれど。

最初の3年間、丹後保健所では中学校と高等学校の8校で保健体育の時間にごん教育をしていました。北部医療センターの看護学校でも授業をしていました。有線放送で健康講座を放送する収録も経験しました。経ヶ岬の米軍基地で新型コロナウイルス感染症が発生したときには、保健所長はパスポートなしでも基地内に入れる権限があったので、体格の大きな軍人達を相手に防衛省の立ち会いのもと、感染症対策の指導をしたのは丹後保健所ならではの貴重な経験でした。

現在の山城北保健所では、人口45万人を包括しているので、様々な経験をする事になりました。知事代理や局長代理で地域の敬老会や戦没者追悼式での挨拶をしたり、京都府議員との懇親会もあります。本学では医学生や初期研修医へのミニレクチャーをしていますし、医学生の保健所見学も受け入れていて、毎日いろいろ違う種類の仕事を楽しくさせていただいています。今年から京都府保健所長会の会長にもなり、2年後に近畿保健所長連絡協議会を京都府で開催しますので、それに向けて準備をしています。

京都府の北部と南部それぞれで仕事をしてきて、どの地域に住んでいても同じ質の医療や保健行政を提供できればいいなと考えています。

6 最後に、後輩の医師と医学生へのアドバイスをお願いします

1つ目は、どんな状況でも医学者としての誇りをもってもらいたいと思っています。これくらいしかできない、とか、これくらいでもういやなどと考えず、挑戦を続けてください。私のように50歳からまた細胞実験を始めることができるケースもあるので、決して夢を諦めないでほしいです。

2つ目は、理想とする研究者や医師についてよく知ることです。よく知ること、自分も同じようなことができるかもしれないと思えますし、夢を継続することにも繋がります。私もいろんな実験をしている中で、素晴らしい研究者を知ることができました。論文を読むことで、その研究者と対話しているような感覚になり、自分の研究を進める助けになりました。

3つ目は、行き詰まって前進できないときは、無理をせず、もう一度自分を見つめ直す機会と考えて立ち止まりましょう。その後、また違う一歩を進めればいいのかと思います。

ありがとうございました。重見先生のインタビューを通して、キャリアの転機やライフイベントを前向きに乗り越えるヒントをたくさんいただきました。どんな状況でも誇りを持ち、自分のペースで挑戦し続けることが大切だと改めて感じました。